

ペルソナ・シナリオ法を用いた学生による 事例作成学習ツールの提案

平野加代子^{*1}, 真嶋由貴恵^{*2}

*1 宝塚大学教育 *2 大阪府立大学

Proposal of a Learning Tool for Creating Case Examples by Students Using Persona Scenario Method

Kayoko Hirano^{*1}, Yukie Majima^{*2}

*1 Takarazuka University *2 Osaka Prefecture University

本研究では、状況に合わせた看護実践を行う上で必要な患者の身体的側面だけでなく、心理的・社会的側面など、様々な状況を考えることを支援する e ラーニング用患者事例作成ツールを開発する。本稿では、そのツールの全体概要について述べる。

キーワード: ペルソナ・シナリオ法, 事例作成, 学習ツール

1. はじめに

大学における看護学教育の質を保証するために、学士課程教育のコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標が提示された(2011)。そこでは、卒業時に習得すべきコアとなる看護実践能力の育成(特に看護過程の展開、看護技術の習得)に効果的な指導方法の検討が望まれている。

看護過程の展開は、看護実践を行うための基本的な能力であり、臨地実習前に修得する内容として位置づけられている。教授方法では、紙上事例(ペーパーペイシメント)を用いることが多いため、患者像をイメージすることが難しい。そこで、課題を把握するための模擬患者参加型授業なども行われているが、模擬患者導入にかかる費用や、単発的な学習や体験にとどまるなどの課題がある。このように従来型の講義形式や参加型の授業では、学生が十分に患者像を把握し、さらに患者の立場に立った看護実践を熟考することが難しい。

そこで本研究では、状況に合わせた看護実践を行う上で必要な患者の身体的側面だけでなく、心理的・社会的側面など、様々な状況を考えることを支援す

る e ラーニング用患者事例作成学習ツールを開発する。本稿ではそのツールの全体概要について述べる。

2. 関連研究

看護過程の学習を支援する e ラーニングでは、真嶋ら(1)-(3)が開発した看護学習サポートシステムがある。これは 100 を超える事例と、その事例に関連する知識教材や看護技術映像、国家試験過去問題などをパッケージにしたもので、授業や自己学習で活用されている。村井らも(4)、看護実践能力の育成のためにシナリオ教材を開発しており、看護過程学習における事例教材の有効性は高いといえる。また、赤津らは(5)患者情報から関連図を作成する際のツールを開発し、可視化を支援している。看護における e ラーニングとして、吉川らは(6)、看護技術習得にむけたブレンディッドラーニングを実践し学習行動や学習評価を行っている。

しかし、これらは、教授者側が作成した教材を学生に使用させることで学習効果を上げようとするものであり、学習者自らが教材を作成するものではない。

本研究では、与えられた事例(ペーパーペイシメントや模擬患者)の情報から患者像を把握するの

はなく、学生自身が患者事例を作成する学習方法を取り入れることにより、より深く患者像をイメージできるのではないかと考えている。

これまでに著者らは、紙面を用いた事例作成学習を試行している。その結果、学生による患者事例の作成で、患者に対する興味・関心を深める効果があることを明らかにした(7)。作成された事例を分析すると、患者の身体的側面に限らず、パーソナリティやライフストーリーをはじめ、具体的な表現が含まれていた。また、事例作成に取り組むまでには時間を要していたが、事例作成を進めていく中で、情報の矛盾や関連する学習課題についても学生自身の気づきや考えの深まりが見られた。

これらの結果を受け、最初に患者事例作成ツールの開発を行った。看護過程のアセスメントツールであるゴードンの機能的健康パターンに情報を入力できるようにした。ゴードンの機能的健康パターンは、①健康認識/健康管理、②栄養/代謝、③感染防御、④排泄、⑤活動/運動、⑥知覚—認知、⑦睡眠/休養、⑧自己認識/自己概念、⑨役割/関係、⑩性/生殖、⑪ストレスコーピングの11のパターンに分類される。

しかし、これらのパターンについて情報を入力していくことだけでは、単なる情報の入力作業にとどまってしまう、患者への関心が深まらないのではないかとという危惧が残る。

3. 患者事例作成学習ツールの概要

学生が患者の立場に立ち、患者の病態や生活、思い等を想像しながら看護実践につなげるためにこれまで取り組んでいた患者事例作成ツールに、ペルソナ・シナリオ法を用いた学習ツールを追加する。ペルソナ・シナリオ法(8)は、製品のターゲットとなるユーザ層の典型的な人物像を、仮想ユーザであるペルソナとし、ペルソナが満足するようなシステムやサービスを考案・設計する手法である。これにより、開発者の一方的な考えではなく、ユーザの要求を抽出し、充足することが可能となる。つまり、このペルソナを患者事例とし、その状況やニーズを把握し、看護側の一方的な判断ではなく、患者中心の看護実践を学習することを可能となるツールを開発する。

ペルソナの作成後、シナリオを作成する。シナリオは、ペルソナがある状況で従来の製品を使おうとしたら、その場でどのようなイベントが立ち起こるのかを次の5つの観点から時系列的に記す。

5つの観点とは、①他者とのコミュニケーション、②行動の時系列、③作成する人工物、④社会的環境、⑤物理的環境である。

具体的な学習手順を以下に示す。

(1) ペルソナ(患者)の作成

学生が将来、臨地実習で受け持つ可能性のある入院患者をペルソナ(以下、患者)として作成する。

患者事例作成ツールにおいて、4名の患者イラストからペルソナ患者を1名選択する(図1)。



図1 患者事例選択ウィンドウ

4名の患者はそれぞれ、太った女性、痩せた女性、太った男性、痩せた男性とした。イラストから老年期の特徴を学習し、患者の特徴から学生がイメージしやすい疾患として、脳梗塞、糖尿病、慢性閉塞性肺疾患、肺がん、胃がんを想定して設定している。

学生は、選択したイラストに患者氏名を考えて入力する(図2)。学生は患者氏名を考えることにより、選択した患者に親しみや興味・関心を持ちながら学習を進めることが期待される。

さらに患者の社会的特徴や心理的特徴、身体的特徴等を考えながら患者情報を追加していく。選択できるのは一般的項目とし、患者の詳細な情報は、自由記載で入力していく。



図2 選択した患者のネーミング用ウィンドウ

図3に患者事例作成の流れを示す。看護の対象は、生活者である患者であることから、家族背景や生活状況などの情報を、最初に選択できるようにした。入力情報としてキーパーソンが「長男」であっても、患者の思いや発言は患者によって異なる。すなわち入力情報の選択とそれに関連した発言や思いを自由に考えて入力する具体的な患者像となる。

さらに生活者である患者をイメージし、その患者が病気になった場合に起こる問題について考えながら情報を選択していく。

学生が情報入力をしていくときに、思いついたままに入力するのではなく、患者をイメージしながら関連する情報を入力させなければならない。特に疾患に関連する情報の場合、情報間に矛盾がないかを確認しなければならない。そこで、学習問題を解答することで知識の確認ができるように設計していくこととした。

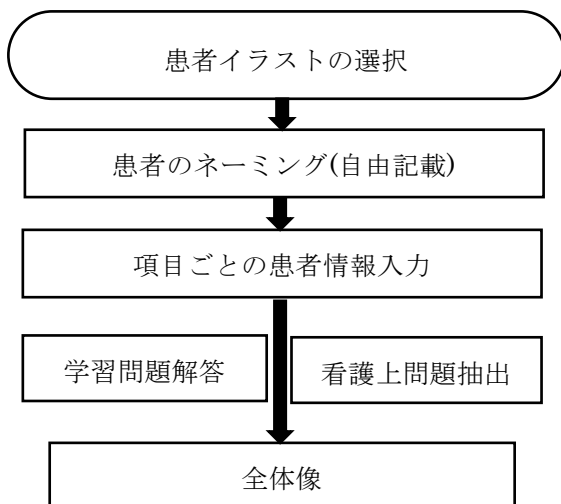


図3 患者事例作成の流れ

(2) ペルソナ患者の全体像の作成

患者情報を部分で把握するだけでなく、全体像としてイメージできるようにする。現段階では、文字が中心であるが、学生がイメージしやすいように視覚情報（イラストや写真など）を選択できるようにする予定である。

作成した事例で抽出された看護問題については、必要な援助項目とその具体的方法について考えるインターフェイスとし、学生が事例をもとにした看護技術の実践をすることで、患者の個別性を考えた計画を立案し、実施できると考える。実施した結果は、PDSAサイクル(Plan:計画, Do:実行, Study:結果の評価, Act:改善)の理念に基づいて学習を進められるようにする。PDSAサイクルは、医療分野や品質マネジメント活動等にその考えが取り入れられており、このサイクルを通して、品質の維持・向上や継続的な業務改善活動などが推進される。看護実践を学ぶ学生にとって、より患者への適切な援助を考える上でも重要な考え方であるといえる。

4. おわりに

従来の看護過程の学習では教員が患者情報を提供するため、情報の分類から学習が始まる。そのため、経験の少ない看護学生にとって対象患者の全体像を十分に把握することができないため、患者の立場に立った看護計画を立てることが困難である。本研究では、学生が、患者側の立場に置き換えて患者の思いや考えなど生活者としての患者が病気になるとどのような状況になっていくか、を具体的に考えられるような学習ツールについてその概要について説明した。今後はツールの完成をはかり実践を行っていきたいと考えている。

謝辞

本研究は、平成26年度科学研究助成基金助成金／基盤研究C 26463265の補助を受けている。

参考文献

- (1) 真嶋由貴恵, 中村裕美子, 前川泰子: “看護教育における臨地実習用ユビキタス学習環境の構築”, 教育システム情報

学会誌,Vol.27, No.1,pp.100-110(2010)

- (2) 真嶋由貴恵,細田泰子: “可視化教材を活用した看護技術教育”, I T 活用教育方法研究,第 9 卷,第 1 号,pp.31-35(2006)
- (3) 真嶋由貴恵,中村裕美子: “看護実践能力の獲得を支援する e-learning—“CanGo”プロジェクトの実践”,看護教育,第 48 卷,4 号 pp.298-302(2007)
- (4) 村井嘉子,堅田智香子,加藤亜妃子,彦聖美,藤田三恵: “看護実践力の向上を支援するためのシナリオ学習教材の開発”,石川看護雑誌,Vol.8,pp93-101(2011)
- (5) 赤津舞子,澤野弘明,鈴木裕利他: “AKaTool(Associate kango Tool):看護教育のための関連図作成ツールの提案と評価”,教育システム情報学会誌,Vol.33, No.1,pp31-42(2016)
- (6) 吉川千鶴子,中嶋恵美子,須崎しのぶ,山下千波,川口賀津子: “看護技術教育のブレンディッドラーニングにおける e ラーニングシステム活用に関する研究”,日本看護研究学会誌,Vol.5, No.5,pp105-115(2012)
- (7) K. Hirano, Y. Majima: “A Proposal of Instructional Design to Promote Understanding a Patient in Fundamental Nursing”, The12th international Congress on Nursing Informatics, in Taipei,(2014)
- (8) A Cooper: “コンピュータはむずかしすぎて使えない”,翔泳社(2002)